

---

# MISTLETOE

p p

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

MISTLETOE

### 【Zマーク】

Z2719D

### 【作者名】

pp

### 【あらすじ】

私は恋なんてしない中学生。友達の美咲に「ヤドリギ」について話を聞いたりするけど、面倒くさいだけ。でも、時期はクリスマス

…。

「ねえ、ヤドリギって知ってる?」

「何?それ」

美咲が突然持ち出してきた話題に、私はぽかんとしていた。ヤドリギなんて知らない。強いて言えば、どこかで名前だけ聞いたことがあるくらいだ。

「植物の一種なんだよ」

そう言つて美咲は楽しそうに語りだした。

「西洋ではね、クリスマスにヤドリギの下で男女が出来つと、キスをする習慣があるんだって」

美咲だつて中学生。思春期だからこんな話に興味があるのは当たり前だ。

なのに、私はどうしても乗り気にはなれなかつた。  
好きな人なんて……いない。

美咲には数年前から思つている人がいる。

周りの人は皆恋をしているのに、私だけ恋に興味さえもなかつた。

恋愛をしたつて何も変わらない。

今すぐ結婚できるわけでもないし、独立できるわけでもない。得なことなんて何もないじゃないか。

「ごめん、ちょっと興味ないや」

私は廊下に出ると、窓越しに外を見つめた。

季節は冬。もうすぐクリスマスだ。

東京では珍しいことに、雪が降つてゐる。

「川本!」

名前を呼ばれて振り返ると、隣のクラスの光<sup>みつる</sup>がいた。

光は中学校入学して初めてできた男友達で、そこそこ仲がいい。私からすればいい友達だが、美咲にとつては……。

「放課後、空いてる?」

雪以上に珍しい。光は普段、付き合いが悪いのだ。

「…別に。空いてるよ」

だるかつたのとさつきの嫌な話題とで機嫌が悪く、そつけない返事を返す。

「じゃあさ、ちょっと駅前の店、回らない？」

「どうして？」

「いやあ、クリスマス前じゃん。何か買おうよ」

「一人で行けばいいじゃん」

「…俺、センス最悪だからさ…。ちょっと買い物手伝つてよ?」

そんな感じに話が進み、放課後に買いたい物に付き合わされることになった。

普通なら男女の言動が逆であるべきだったが、そんなのどうでもよかつた。

駅前で光を待っていると、クリスマスの飾りつけが目に入った。目の前でイチャついているカップルを見ていて、美咲への罪悪感が沸いてくる。

(美咲も誘うべきだったかな?)

「お待たせ!」

光が予定時刻よりも15分ほど遅れて到着した。

「…遅い!」

なるべくアベックだと思われないよう、距離をとった。本来、ここにいるべきなのは自分ではなくて美咲なのだ。

「これ、めっちゃ綺麗じゃね?」

光は手にモールを持って来た。それを目の前で広げてみせる。私は何か見つけては持つてくる光が、だんだんうつとうしく感じてきた。

でも、それと同時に、まるで光が飼い主に甘える犬のようにも見えてきた。

「それ、欲しいの?」

「うん…」

買い物が進むにつれて、いつもと違った光が見えてきた。自分よりも身長が高くて、スポーツが得意で、頭もいい。何だかお兄ちゃんのような存在だつたけれど、以外とかわいいものが好きなようだ。

「川本、ありがとな」

「いいえ、どういたしまして」

家に帰る頃にはさつきまでの不機嫌はどこへやら、こいつの間にか笑顔になっていた。

「そうそう、明日、俺ん家でクリスマスパーティやるから、お前も来いよ！」

「うん。… 美咲も誘つていい？」

今度は忘れまいと、しつかり美咲の名前を出した。

「ああ、いいぜ！ んじゃあ、午前10時からだからな！ 俺ん家に直接集合…」

家に帰つて、美咲にメールした。

しかし、明日は空いていないと返事が来た。

(残念…せつかく光と仲良くできるチャンスだつたのに)

とりあえず光に、美咲が行けないことを連絡をした。

返事はすぐに返ってきた。

『残念だな…。俺のダチも明日は空いてないってさ。メンディから、明日迎えに行くよ』

二人だけのクリスマスパーティ。もはやパーティではなくなつているような気がする。

そんなことを考えつつも、明日が楽しみで寝付けなかつた。

「おーい！ 川本！」

チャイムの音と、聞きなれた声で目が覚めた。

何か忘れているような気がする。

(しまつた！クリスマスパーティー！)

慌てて身支度を済ませると、玄関から勢い良く飛び出した。

「おっせえよ！」

「うるさいなあ！今起きたの！」

光の家に行くには、駅前を通る。

クリスマスの飾りに再び目が行くが、私はパーティーのことで頭の中が精一杯だった。

「そうだ、ちょっと昼メシに何か買つてくれから、ここ寄らせて」「どうやら昨日買いそびれたらし」

光は食品売り場で、ケーキやら何やらを買つていた。  
私は暇を持て余して、一人で周りの店を見ていた。  
しばらく経つて、私は光を急かそうと振り向いた。  
しかし、誰もいない。

(あれ？光？)

どこに行つたのかわからぬ。

私は焦つて、あちこち走り回つた。

「光？光？どこ？」

置いて行かれてしまつたのかと思つたそのとき、駅の反対側に光を見つけた。

「光！」

走つていくと、光もそれに気が付いて手を振つた。

「まったく！探したんだよ！光！」

「ワリィワリィ。ちょっとこここの飾りに見とれててさ」

そう言つて、光は私の頭を撫でた。

上を見上げると、昨日光が買つたのと同じモールが綺麗に飾り付けられていた。

光の部屋も、今はこんなかんじになつてているのだろうか？

「そうそう、買い物終わつたぜ！」

先に行こうとする光を私は引き止めた。

見つけた。飾りの中に。昨日、美咲が話していた「ヤドリギ」を。

「「小さな白い花で、クリスマスの装飾に使われるんだよ」」

私は西洋の人ではないけれど、「これはきっと、愛情表現の一つだよね?」

そう思つて光の頬に、小さなキスをする。

「…どうしたんだよ急に?」

光が照れながら笑い出す。

「西洋では、クリスマスに男女がヤドリギの下で出会いなど、キスをしたんだって」

そう言つて私は先に歩き出した。

「待てよ。キスつて言つたら…」

唇にやわらかい感触。

「普通、こうだろ?」

びっくりしてぽつりとしている私の手を引っ張つて、光がにつっこり笑つた。

「ああ、これからお楽しみのクリスマスパーティーだぜー。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2719d/>

---

MISTLETOE

2010年12月6日12時13分発行